

「チヂミザサの探究(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

秋のこの時期になると、草むらを歩いていると、ズボンや靴下に、何やら植物の種子のようなものがたくさんくっついてくることがある。いわゆる「ひっつき虫たね」と言われるものだ。「ひっつき虫の王様」は「アメリカセンダングサ」という植物で、これは種子の先端が釣り針のような形状で、がっちりとして布や獣毛をつかむ。



「ひっつき虫植物」はほかにもたくさんある。この「チヂミザサ」という種類もその一つだ。何でもない雑草で、そこらじゅうで見られる種類だ。



チヂミザサは、特に写真のような、森や林と草原の境の「林縁部」という環境を好むようだ。私の山荘の裏庭もまさにそんな環境なのだ。今年は思うように草刈りもできず、大群落を形成されてしまった。



チヂミザサ *Oplismenus undulatifolius* はイネ科の多年草である。しかし葉はレンズ型で小さく、いかにもイネ科らしくない。夏の間、穂が立たないうちは背も低く、こんな凶悪な雑草になるとは想像もつかない。



夏の間は9月中旬ぐらいから急に穂が伸びて、たくさんの花穂をつける。それがあつという間に種子になり、そのあとが大変なのだ。



チヂミザサのある草むらをちょっとでも歩くと、このようにズボンが種だらけになってしまうのだ。